

「救援関西」発足 24 周年の集い

次世代ともつなぐ交流・支援を継続しよう

チェルノブイリ被災地訪問報告

ヒロシマ・ナガサキとチェルノブイリ・フクシマを結んで

フクシマを「核時代の終わりの始まり」に



# 【プログラム(予定)】

- ・山科和子さん挨拶(救援関西代表・長崎被爆者)
- ・「救援関西」24年を迎えて(事務局)
- ・ベラルーシ訪問報告 (振津・長沢・猪又)
- 討論

「ヒロシマ・ナガサキ 70 年からチェルノブイリ 30 年フクシマ 5 年に向けて」来年の取り組みなどについても話し合いたいと思います。

・アピール

· 他

**☆救援バザー**:かわいいベラルーシ民芸品、美味しい手作りケーキ等盛り沢山!!

是非お越しください!!

日時:12月13日(日) 午後1時半~4時半

場所:大阪市立総合生涯学習センター5階

第1研修室 (大阪駅前第2ビル)

参加費:800円(学生500円)

連絡先: 072-253-4644 いのまた 0797-74-6091 たなか



# 次世代ともつなぐ交流・支援をめざして

# ベラルーシの被災地へ支援を届けてきました

9月21日から29日まで、ベラルーシのチェルノブイリ事故被災地と、高汚染地からの移住者の方たちの住む町を「救援関西」のメンバー4人(長澤、松川、振津、猪又)で訪問してきました。今回は、前号でもお伝えしたとおり、今まで被災現地でドーンと根を張り、私たちの支援・交流の受け入れに尽力していただいたベーラさん(小児科医)やバーリャさん(元教師)のお力を借りることができない中で、全て「自前」で移動の手配やアポ取りなどの準備も行わなければならないというかなり困難なものでした。渡航手続きの煩雑化、現地での受け入れ先とのコンタクトなど、振津さんの粘りとモスクワ在住の通訳の松川さんの活躍とで無事に訪問が果たせました(私はハラハラしながら成り行きを見守ることしかできませんでしたが)。

今回の訪問では、今までの交流・支援の上に確かな信頼・友情が築き上げられていることを再確認しました。そして、それは次の世代へも引き継がれつつあります。被災地クラスノポーリエでは、迎えて下さった地域の人々の対応に、これまでの交流が定着していることを感じ(「市民権」を得ている)、行く前の微かな不安は吹っ飛びました。日本の多くの皆さんのご協力で続けられている支援が、ささやかであっても本当に被災地に届き、人々に役だっているとも感じました。皆さんからのカンパで、学校では、家庭科で使うアイロンのセット、掃除機、ラジカセなど、また幼稚園では給食用の食器や鍋、事務用品など、日々、必要な物が購入され、本当に生きた支援金として活用されていました。

また夕食の買い出しに行った時には、スーパーマーケットのレジのおばさんに「ベーラさんはどうしているの」と聞かれたりもしました。「クラスノポーリエの母」と地域の方に信頼され、慕われてきたベーラさんの人柄が伺われます。そのベーラさんは、一年前に脳卒中で倒れ、後遺症で左半身マヒがありベッドでの生活です。お宅を訪問すると、ベーラさんは車いすで私たちを迎えてくださいました。そして夫のニコライさんや、娘さん、お孫さんたち、ご家族全員で私たちを暖かく迎えてくださり、皆で一緒に用意してくださった食事のテーブルを囲み、再会を喜びあいました。ベーラさんは、やはりフクシマのことも気遣って質問をしてこられました。クラスノポーリエを発つ日に、お別れの挨拶に再び訪れました。いよいよ出立という時、ベーラさんはベラルーシの習慣に従って、慌ただし



く旅立とうとする私たちに、しばらく座って 気持ちを落ち着かせるように促し、私たちの 旅の安全を祈ってくれました。ご自分がしん どいのに私たちを気遣ってくれる、なんと心 優しい人なのかと・・・。

ミンスクのマリノフカでは、「移住者の会」 代表のジャンナさんのお宅で、交流会を持っ て下さいました。今回は、「次の世代にも活動を繋ごう」と、若い人たちにも声かけをし、 2人の若い女性が参加してくれました。移住者の皆さんは事故当時を思い出し、それぞれの思いを熱心に語ってくださいました。そして「核はコントロールできない。コントロールできないものに触ってはいけない。私たちの世代の失敗を繰り返してはいけない」と話され、あらためて「核を使用してはいけない」ということが、チェルノブイリのヒバクシャと私たちの共通の思いになっていることを感じました。

昨年は、私たちの支援金で子どもたちのベビーフードなどを購入して必要とされている 家族に配布されたとのこと。ここでも支援金が必要とされている人のために活かされてい ました。

他にもご報告したいことがいろいろあります。詳しくは「発足 24 周年の集い」で報告いたしますので、皆さん、是非おいでください。

猪又雅子

## チェルノブイリ事故 29 年目のベラルーシを訪れて

≪10年ぶりのベラルーシ訪問≫

到着したミンスク空港は、私が 2005 年以来の訪問だからよけいに感じるのかも知れませんが、とても立派になり、高速道路も整備されて車が増えていました。新しい建物に多くの店舗と豊富な商品が並びます。しかし、首都のミンスクを出るとすぐに草地と畑と森が見渡す限り続きます。車で 5 時間、モギリョフ州クラスノポーリエは、10 年前と変わらない街並みと、公園で遊ぶにぎやかな子どもたちの声がありました。

今回の訪問の詳しい報告は、12月13日の「救援関西発足24周年の集い」でご報告しますが…印象に残ったクラスノポーリエの二人(教育長のセルゲイさんと、「こども障がい者センター」の責任者ナジェーダさん)のお話を紹介します。

≪もとのようにはならないが…子どもたちが希望持てるように前向きに考えたい≫

招聘状を出してくださったクラスノポーリエの教育長、32歳のセルゲイ・アレクサンドロビチさんにお会いしました。セルゲイさんは学生時代に米国に2年間留学した経験がある「若い世代」です。「人口2万人余りの町だったクラスノポーリエは、事故後、広範囲の立ち入り禁止区域ができ、移住のため人口が減り、今も1万人余りで、もとにはもどっていない。高汚染地では農業が禁止され、パンや麻やレンガの工場も閉鎖されてしまった。若者が減り、4割が年金生活者となり高齢化がすすんでいる。

人が住んでいる場所の線量は下がっているが、森の中は今でも注意している。きのこや木の実をとってよい場所は『汚染がない』と指定されたところだけ。こどもたちは年に一回は保養に出しているが、以前の様な国外での保養は減っている。汚染地ということで無料だった給食は、今では有料になった。5年生までは給食が朝昼2回、6年からは1回になる。移住しないで住み続けることを選んだ、高汚染地との境界にあるパルシュ地区(セシウム137で15キュリー/km2以上の汚染があった。福島事故後の飯舘村と同じくらいの汚染レベル。)では、無料の給食が今でも3回出る。それでも、こどもたちに希望が持てるように、いつも前向き考えたいと思う。」と、セルゲイさんは話されました。

≪子どもたちを守りたい≫

「こども障がい者センター」の責任者のナジェーダさんは、ご自身も事故の時には妊娠

中で、いろんな思いがあったそうです。ご主人が区役所の畜産部長だったので地元を離れられなかったそうです。

「このセンターでは、障がいのあるこどもたちのケアを行っている。家が遠い子はバスで送迎する。給食も出す。障がいのある子は痙攣があったりして、保養も親が付き添わなくては行けなかったりする。以前は、欧州の民間基金から物資の支援もあり、オランダやイタリアに保養に行くこともあった。小児麻痺の子がリトアニアのリハビリセンターに行き歩けるようになったこともあった。最近では、そのような支援はほとんどなくなっている。」と、ナジェーダさんはセンターを案内しながら話してくれました。

「障がい者センター」の先生たちは、本当にコマメに庭の遊具や、こどものベッドカバーやカーテン、教材まで手作りして熱心に働いていますが、食器やアイロンなど当たり前の備品も購入できないくらい、国からの経費がありません。親の経済状態も厳しく、教師や保母でも月2万円位、コルホーズや介護職で1万5千円位なので、生活は苦しく、多くの家庭で父親がモスクワなどに出稼ぎに行っている状況があります。

### ≪美しい森と湖≫

チェルノブイリから間もなく 30 年ですが、ベラルーシの被災地は事故の重い負担を抱えて、試行錯誤しています。政府は線量の少し下がった土地を再使用することを進めはじめています。30 年経っても汚染地の故郷に戻りたいという人もいる一方で、若い人は、当然、放射能汚染を恐れて地方の被災地域に赴任することを敬遠する人もいます。

そんな被災地でベーラさんをはじめ、地域の皆さんは 30 年も頑張ってこられたのに・・・まだ・・・ そう思いつつ、ふとみると。クラスノポーリエ郊外



の湖は本当に美しく、時間が止まったように、静かに森の影を湖面に映しています。ゆったりした自然の時間の流れのなかで、人間の時間はまるで一瞬のように思えました。

そうですね。長いスパンで!若い世代の力も得て!続けることしかない!

長沢由美

# カンパ・会費の納入ありがとうございました!!

 $(2015.9. 16 \sim 2015.11. 12)$ 

木下佳子 嶋田千恵子 齋藤由佳 奥平純子 田坂冨士男 中沢浩二 斉藤日出治 寺本和泉 斉藤玖仁子 田原良次 堀田美恵子 森本良子 藤田達 染木冨美代 折口晴夫即徳寺 小松裕子 庄田政江 村上玲子 大田美智子 木村英子 高木祥吾 奥谷恵子康由美 井上和歌 三田宜充 Pカンパニー 山崎隆敏 堀口眞也 小村幸子 鎌田妙子振津かつみ 田中章子 長沢由美 久保きよ子 猪又雅子 (順不同・敬称略)

## 今年もクラスノポーリエの子どもたちが "ノボ・キャンプ" に参加!!

皆さんに協力いただいている「保養支援」で、今年も、クラスノポーリエの子どもたち5人がロシアの非 汚染地域ソラーシュで行われているノボ・キャンプに参加することができました。夏休みの始まる6月に3 週間にわたり参加したものです。学校訪問の時、キャンプに参加した子どもたちが、教室で私たちを待って いてくれました。そして女の子は堂々と、男の子はちょっと照れながら楽しかったキャンプの様子を語って くれました。キャンプはどんな様子か尋ねると「是非、自分で行って体験してください。」と! やはり、日 常と離れた新しい出会いや体験はすごく楽しく充実していたようでした。



今年は残念ながら、チェリコフからの参加はできませんでした。準備は進めてもらっていたのですが、書類の行き違いがあったようです。でも今回の訪問で、来年からはチェリコフからもまた参加することを確認できました。ささやかではあってもこれからも息長くクラスノポーリエ・チェリコフの子どもたちのノボ・キャンプへの参加を支援していきたいと思います。どうぞ、引き続きご協力をよろしくお願いいたします。

## <ノボ・キャンプに参加した子どもたちの感想>

ノボ・キャンプをとても気に入りました。僕とジーマは同じグループになりました。グループはとても仲良しでした。とっても恰好いいリーダーのスチョーパ、ナターシャ、デニスがいました。僕はスチョーパが一番気に入りました。僕はデニスとスチョーパと FIFA トーナメントに参加しました。食堂に行った時には自分たちのグループの話をしました。(注:ノボ・キャンプでは、ボランティアの大学生が、子どもたち20人くらいの「リーダー」になって、滞在中、一緒に寝泊まりしながら世話をしています。)

ノボ・キャンプにはとてもたくさんのサークルやイベントがありました。ビジネスゲームもありました。 プールで泳ぎました。カヤックに乗りました。「カラー祭り」の日がありました。 つまり、全部気に入りました。

マクシム (6年)

ノボ・キャンプは素晴らしかったです。とても楽しかったです。全部気に入りました。イベント・サークル・食事。私はボーカル(声楽)と工作のサークルに行きました。プールで泳ぎました。カヤックに乗りました。カラー祭り「ハーン」もありました。ノボ・キャンプの誕生日もありました。花火もありました。とても気に入りました。夜はディスコもありました。

またノボ・キャンプに行きたいです。

スタンソワ・カーチャ (6年)

# 戦争はいやや!核なんていらへん! 反核フェスティバル

2015年10月18日、抜けるような青空と爽やかな風のもと、大阪東住吉区の長居公園で、31回目の反核フェスティバルが開かれました。

93歳になる長崎被爆者の山科さん(「反核フェス」代表)は、 赤いTシャツのお兄さんたちに車いすごと舞台に上げてもらい、開会の挨拶をしました。「ありがとう、みなさんありがとう!戦争を知る人は少なくなったけど、絶対にふたたびあの時代にもどしてはいけない!戦争してはいけない!核を使ってはいけない!」小柄な山科さんからビックリするような強い声で



訴えられました。「戦争はいやや!核なんていらへん!反核フェスティバル」今ほど、この合言葉がぴったりの時代はないのかもしれません。



ラルーシグッズとコーヒーとケーキの店です。9月に仕入れたマトリョーシカやモミの木の鍋敷きを売りながら、チェルノブイリの事を知ってもらうきっかけにしようと、交代にセールストーク。展示にも案内しました。立ち寄った方々はベラルーシの民芸品の麻人形やキーホルダーを手に取って「かわいいね」。仕入れた甲斐あり、皆さんによく協力していただきました。

「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」は、例年どおりべ

「ゴー!ゴー!ワクワクキャンプ」の伊達さん、石橋さんが

応援に来てくださり、関西での保養のとりくみについて展示とアピールをしました。通りがかる方々は、フクシマ事故被災地の子どもたちの「保養」の事を知らない方もおられ、昨年の報告書も少し売れました。

舞台は、ダンス・コア・ポシブルの創作バレエでした。楽しそうに遊んでいる女の子・戦争の時代・市民の犠牲・兵士の苦悩・祈り・・・谷川俊太郎の「死んだ男の残したものは」・・・と象徴的な構成ですが、「秘密保護法」「戦争法」「マイナンバー」と続く今の時代、なんだか怖いくらい重なる舞台でした。



他の団体の出店の焼きそばを食べながら、ついでにうちの売り物のコーヒーを押し売りしたりしつつ、フェスティバル参加団体同士や市民のみなさんと交流できたのが良かった反核フェスティバルでした。来年は参加団体をもう少し増やして、地域の子供会・高校のボランティアクラブや音楽サークルなども招待できればなあ・・・。とか思いました。

ゆみ

### Pカンパニーダンス公演『生きる生きる踊る踊る』会場ロビーにて

# チェルノブイリ・フクシマ救援バザー

今年も "反核フェス"のトラック舞台でバレエ『平和を願い』を踊ってくださった小谷ちず子さんとダンスコアポシブルのみなさん、実は1週間後に選抜メンバー "Pカンパニー"の公演を控えておられました。 先に公演のご案内が届いていたので、"反核フェス"への出演はとうてい無理だろうと言いつつも、一応お願いしてみた厚かましい救援関西でした。その後、小谷さんが快諾してくださったという連絡があったときには、驚きました。

「大丈夫・・・なんですか?」と"反核フェス"当日に伺ったところ、

「みんなが『1週間前にガタガタしてたんじゃダメですよね。毎年 のことだから是非"反核フェス"には出ましょう』と言ったの。 安心して」とちず子さんのお返事。とは言え、"反核フェス"の 日の午後ももちろんリハーサルというスケジュール、お疲れさまで ございます。

|さて、10月24日(芦屋ルナホール)のリサイタル、みなさんの練習の成果を楽しみに、救援関西スタッフ4人がいそいそと出かけました。去年に引き続き、ロビーで救援バザーをさせていただけることになっているので一石二鳥です。9月のベラルーシ訪問でどっさり買ってきたマトリョーシカや民芸品を並べてお客さんを待ちます。ついでに手作り品もチマチマとそのお隣に。やはりマトリョーシカの魅力は抜群で、「救援カンパになります」と言うと、「これがいいかしら? それとも・・・」とお好みのを選んで、買ってくださいます。ありがたいことです。

公演が始まると、すかさず会場へ。第1部はゲストダンサーと演奏家の組み合わせをくじ引きで決め、踊り出すという即興ダンス。4組がそれぞれの個性を活かした味のあるダンスを繰り広げます。舞踏と音楽とのコラボがおもしろい。欲を言えば、もう1回くじ引きして、違ったパートナーでも踊ってほしかったなぁ。と、どこまでも厚かましいわたくしです。

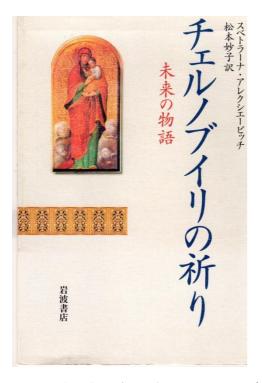
第2部は小谷さんとPカンパニーが交互に登場。『平和を願い』 も奥行きのある舞台で、動きが大きくより豊かな表現が見られました。バージョンアップした『ボレロ』も圧巻でした。昨年はグループごとに列をなして躍動する流れを強調した振付でしたが、今年は個人技が随所に取り入れらえており、日常しい進化を遂ばていました。 辛は山下洋軸ですわる。 べぶれ

目覚しい進化を遂げていました。音は山下洋輔ですね? ベジャー 終了後ロビーでリクエストに応えてポーズ! ル版は繰り返しの妙が観客になんとも言えぬ緊張を伝えますが、小谷版ははじけるような若さが気持ちよい。 と、まぁなんと生意気な感想でしょう。

こんなにもすごい、レリーナとは知らず、救援物資の荷造り作業が小谷さんとの最初のお出会いでしたね。 長きにわたってお付き合いくださり、活動の余禄の大きさに感謝しています。

(でも もっとバレエ見に行きたくなるのが困りもの。いや困らんでもエエか。田中あ)

# スベトラーナ・アレクシェヴィチさんがノーベル文学賞受賞



PCで作業していたら、ニュースを見ていた夫が「今年のノーベル文学賞はベラルーシの人だって」と。「アレクシェヴィチさん?」と尋ねると「知ってるの?」夫は名前を知ってるか読んだことあるのかという意味合いで聞いたと思いますが、「うん、うん、いっしょにご飯食べたことある!!」とドヤ顔で答えました。(ミーハーでんな)

2003年10月"チェルノブイリ救援中部"の招きで来日された 『チェルノブイリの祈り』の著者アレクシェヴィチさんの大阪講演会を"救援関西"が主催しました。前日打ち合わせに振津さん とたまたま私が(ヒマやからね)行き、スケジュール確認の後、 スベトラーナさんと通訳の方と4人で小さな居酒屋で夕食。その 時はベラルーシでジャーナリストとしての活動を制限され、ヨー ロッパの報道関係者(多分)の力添えでパリに住んでおられるこ と、ずいぶん読書をしておられることなどを伺いました。

その後も池澤夏樹の本にアレクシェヴィチさんのことが書かれていたりで、活躍され評価されているんだと喜んでいましたが、ノーベル賞! これで読者がぐんと増えますね。原発事故や戦争がどんなに人々を苦しめ、一人ひとりのかけがいのない生活を壊してしまうものか、弱者の悲惨が直接の聞き書きによってヒシヒシと伝わってきます。著書が再版されるそうです。どうぞ お読みください。そしてお知り合いに話しかけるきっかけにしてください。

#### アレクシェヴィチさんの主要著書:(ウィキペディアから引用)

- *У ВОЙНЫ НЕ ЖЕНСКОЕ ЛИЦО* (1984) 邦訳『戦争は女の顔をしていない』 三浦みどり訳、群像社、2008年。
- ПОСЛЕДНИЕ СВИДЕТЕЛИ (1985) 邦訳『ボタン穴から見た戦争』 三浦みどり訳、群像社、2000年。 原題は『最後の生き証人』。
- ЦИНКОВЫЕ МАЛЬЧИКИ (1991) 邦訳『アフガン帰還兵の証言』 三浦みどり訳、日本経済新聞社、1995年。 原題は『亜鉛の少年たち』。
- 3 а ч а р о в а н н ы е с м е р т ь ю (1994) 邦訳『死に魅入られた人びと一ソ連崩壊と自殺者の記録』 松本妙子訳、群像社、2005年。
- 4EPHO5ЫЛЬСКАЯ МОЛИТВА, ХРОНИКА БУДУЩЕГО (1997) 邦訳『チェルノブイリの祈り』 松本妙子訳、岩波書店、1998年。

10月23日、「若狭ネット」の呼びかけで他の市民団体と一緒に「10月26日・「反原子力デー」にちなんで関西電力に申し入れを行いました。

2015年10月23日

## 反原子力デーに際しての関西電力への申し入れ

### 関西電力株式会社社長 八木 誠 様

「コントロールできないものに触ってはいけない。私たちの世代の失敗を繰り返してはならない。」チェルノブイリ原発重大事故による高濃度放射能汚染により移住せざるを得なかった被災者の言葉です。今年9月にミンスクの移住者の街・マリノフカを訪問した時に、事故時や移住後の困難な苦しい生活を思いだし、語ってくださいました。その困難な生活の中で被災者は「移住者の会」を作り、自分は一人ではないとお互いに助け合い、励ましていろいろな困難を乗り越えてきました。

チェルノブイリの被災地では 29 年経った今も放射能汚染が続き、人々は放射能の中での生活を余儀なくされています。被災地では今も被ばくを少しでも低減させ、住民の健康を守るための努力が続けられています。

東京電力福島第一原発事故から4年9か月が経ちましたが、問題は山積です。事故は未だに収束せず、高濃度の放射能汚染の下、収束作業のために働く一日7000人もの労働者の被ばくは深刻なものとなっています。先日、元作業員が白血病で労災認定されましたが、これは氷山の一角と言わざるを得ません。残念ながらこれからも長期にわたって被ばく労働は続きます。厳重な被ばく管理と健康管理が必要とされているにもかかわらず、政府は被ばく基準の緩和を行おうとしています。今も福島県だけでも10万人以上もの人々が避難生活を強いられ、元の生活には戻れません。避難者は、事故が収束せず、汚染がまだ残る中での帰還か、移住か等、重く苦しい選択を迫られています。

チェルノブイリとフクシマの二つの原発重大事故は、その悲惨で甚大な犠牲の上に、原発はひとたび重大な事故を起こせば生命権や健康権などの基本的人権が著しく侵害され、その被害は長期にわたり、取り返しのつかないこと、そして事故収束は困難を極めることを示しました。もうこれ以上繰り返してはならないのです。

貴社は何が何でも原発を再稼働しようと突進しています。4月の福井地裁の高浜3・4号機の運転差し止め仮処分命令にも異議申し立てを行い、差止めの仮処分が出ているにもかかわらず再稼働の準備を進めています。昨年5月には福井地裁で大飯原発3・4号機運転差止判決が出ています。貴社が今なすべきことは、判決を受け入れて高浜3・4号機、大飯3.4号機の再稼働を断念し、全原発を廃炉にすることです。そして再生可能エネルギーに抜本的に転換することです。経営を刷新し、電気料金を値下げして爽やかに生まれ変わることです。そうすれば、行き場のない核のゴミ=使用済核燃料もこれ以上増え続けることもありません。

原発がなくても電力は足りています。いい加減に原発にしがみつくことは止めて、今度こそ再生可能エネルギー に抜本的に転換してください。

以下申し入れます。

- ・チェルノブイリ・フクシマを教訓とし、大飯・高浜原発を再稼働せず、貴社の全原発を廃炉にしてください。
- ・再生可能エネルギーに抜本的に転換して下さい。

チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西

### 

# \*交流会~ロシアのチェルノブイリ被災地からアントンさんを迎えて

日時: 11月19日午後6時半~

場所:市民交流センターひがしよどがわ 403号

主催:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西

ロシアのNGO「タディミチーチェルノブイリの子どもたちのために」の代表アントン・ブドビチェンコさん を迎え、同NGO が運営する子どもたちのための非汚染地域での「夏キャンプ」の様子などをお聞きし、チェ ルノブイリとフクシマの共通の課題、またそれぞれの特殊性なども踏まえて、フクシマ事故後、関西各地で も取り組まれている被災地の子どもたちの「保養」の意義や課題についても話し合い交流します。

### \* ウラン開発に反対する米先住民との連帯集会

~アコマ・プエブロのペトゥーチ・ギルバートさんを迎えて~

日時: 11月24日午後6時半~

場所:市民交流センターひがしよどがわ 403号

共催:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西/ヒバク反対キャンペーン

原発の燃料や核兵器の材料となるウランの多くは、世界中の先住民の土地で、環境汚染と被ばくを先住民に押し付けながら採掘されています。米ニューメキシコ州の先住民の聖山・テイラー山の麓で、日本企業が出資する新たなウラン開発計画が進められています。現地でウラン採掘に長年反対し、先住民の権利の確立を求めて国際的にも活動されている先住民アコマ・プエブロの活動家ペトゥーチ・ギルバートさんを迎え、現地の実情、先住民のおもいと運動などを話していただきます。これ以上のヒバク被害を許さないために、連帯した私たちの取り組みについて考え、行動しましょう。

# \*「救援関西発足24周年」の集い(表記)

日時: 12月13日(日)午後1時30分~4時30分

場所:大阪市立総合生涯学習センター第1研修室

(大阪駅前第2ビル5F)



ニュース発行:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局

cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp

連絡先:〒591-8021 堺市北区新金岡町 1-3-15-102 猪又方

0722-53-4644

郵便振替:00910-2-32752

口座名:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関